

どこでも生きていけるんだろうなみたいな自信が今

はありますね

語り手 林 愛子（高校二期生・企業運営） 聞き手 吉田彩乃

*

高校生時代

― 本日はよろしくお願いします。

よろしくお願いします。

― ざっくりな質問なんですけど、高校生活はどのように過ごされていましたか。

はい。ああ、難しい（笑）。色々したんですけど、まず立守に入って、私は高校一年生の時にタスマニアの方に研修に行って。で、夏休みをその準備に費やしたりとか、学校に来て準備したりとか勉強したりとか、向こうでするプレゼンの練習をしたりとか、そういったことをしていました。あとは、いつから入ったか忘れちゃったんですけど、私サイテック部に入って。そこでもなんか琵琶湖の研究みたいな、高校生なりの研究みたいなをしていて、その時は、琵琶湖のブルーギルの食性について研究していました。で、まあ、そういうのもやりつつ、高校二年生の時は、イギリスでサイエンスワークショップっていうのがあって、それに応募して、イギリスに行って、現地の高校生とワークショップをして……ってしてましたね。前後はその準備とか自分の勉強とか。で、そうだ、二年生の時から一年生の時か忘れちゃったんですけど、深草（立命館高校 現在は長岡京に移転）で、サイエンスフォーラムみたいなのでやられていて、そういうのにも参加していました。そこも各国から生

徒が集まって自分たちがやっている活動とか発表するみたいな。その中で私もサイテックでの研究をご紹介したりとかはしていました。で、それで高校三年生の時に「水フォーラム」をやるってなって、立守でうちらがホストになって日本の高校生だけじゃなくて外国からの高校生も集めて。じゃあその委員会に入りたいってなって、私も実行委員になって、そこでその運営みたいなこともしてました。

― タスマニアに行かれたのは海外研修なんですか。それとも個人で？

あ、その時は何だったかな。「行きたい人いますか」みたいな感じ。で行きたい人だけ行くんだけど、枠が決まってるから八木先生と吉本先生と面接みたいなをして。それで無事に選ばれて。

― すごく有意義な高校生活を。

立守じゃなかったら絶対そんなことできなかったな。

― 元々英語は得意だったんですか。

元々英語は別にそんなになんていうんですかね、あの、普通に中学校で勉強して、高校でも勉強して。でもそんな高校で勉強し始めた内容っていうのが、受験勉強のためじゃないもつと実践的な、この英語の勉強っていうのをして「あ、なんかすごい楽しい」と思って。その時、今まで得意でも不得意でもなかったけど、なんかいきなりバンツて、なんていうんですかね、自分の気持ちもそうだし、受け取り方とか理解度みたいなのがパツて変わって。そこから自分で勉強するようになりました。その時、今も覚えてるんですけど、英語の文章を日本語に訳すんじゃないかって、文節で区切って理解しなさいみたいな読み方を学んで。そっからすごい自分の理解が広まりました。すぐにパツて理解できるようになって、なんか英語をそのまま英語で理解できるようになって。でも高校一年生の時は全然喋れなくて。で、タスマニアに行って現地の生徒たち

ともうまく喋ったりとかできないで。行く前もすごい緊張したし、行つてからというときすごいいろいろ大変なこともあったんですけど、楽しかった。でもそうね、終わってから日本に帰ってきて、「なんか楽しくない」って（笑）。

―期間はどれぐらい行ってたんですか。

一週間もないぐらいなんですけど。そんな時まだ一六歳で、まだ若かったし、すごい刺激的だったっていうのもあって。行つた後はすごい落ち込んで、なんか日本が楽しくないみたいな。

―喪失感みたいな？

そう、そう、そう、そういう感じがあつたんです。なんかそこから英語勉強しようと思つて。自分で勉強したりとか。その時は今みたいにAIもないし、ラジオ英会話っていうのを聞いて。それで自分で発音とか勉強したり。

―イギリスに行かれたのも同じような何人かで海外研修みたいな？

そうです。立守から何人か選ばれて、あとは立命館と関係ない人とかと一緒に、事前学習は日本でして。で、イギリスの国とグループプロジェクトをして、グループを組んで、ディスカッションしたりとかしたかな。

―へえ。すごい楽しそう。

すごい楽しかったです。二年生の時はもう「水フォーラム」の準備もしつつ、サイテック部でなんか色々ごちやごちやしたりして。三年生の時にシドニー大学で、それも二週間ぐらい現地の高校生と、日本とかアジアとかアメリカとかイギリスとかいろんなところから高校生が集まってみんなで勉強するみたいのがあって、それに応募して。

で、それ日本で何人かしか選ばれなかったんですけど、私選ばれて行つて。で、そこで私はなんか海外の大学行くのもありかなと思つて。で、立命館大学に進学せずにそのまま一回タスマニアに戻つて。

―かつこいい。不安はなかったんですか？ みんなあれですよ。今と同じように立命館大学に。

そう。立命館大学に行く人がほとんどだったんですけど、本当に高校ですごく迷つていて。その時いらつしやつた先生に、あの、海外で修士を取つた人がいらつしやつて、その先生に相談した。で、その時に、立命館（大学）に進学して一年留学とかつていうのもできるけど、そこで学ぶ内容つて、海外の四年制大学一年生、大学一年分とか、ま、三年だったら三年の三分の一しか勉強できない。向こうで勉強することの三分の一しかできない。で、日本の大学の勉強も一年間無駄になつてしまう。だったらなんかもう海外大学行っちゃつた方が良くないって言われて、確かにそうだなと思つて。

―プロフィールみたいところに書いてたと思うんですけど、修士まででしたっけ？

ううん、博士まで。

―じゃあ、え、何年ですか。

三年間大学行つて、一年間その博士に行くための課程みたいのがあって、博士に四年間行つて。で、博士四年間。だから多分八年か九年ぐらい。

―ええ、すごい。

で、今はその大学を卒業して日本に帰ってきて、神奈川で働いてます。

—えっと、会社運営でしたっけ。プロフィールに企業運営って書いてあったんですけど。

いや、ちよつとどつちかつて言うと、他の会社さんと一緒に何かできないかなみたいな、新しい事業を開拓するところであつたりとか。共同研究の立案であつたりとか。あとは共同研究が始まったらそのマネジメントみたいなをやっています。

—そういう業界に入ろうと思つたきっかけとか、どういう思いで入ろうと思つたんですか。

私ずっと高校生の時から守山で生まれ育つてきていて、近くに琵琶湖があつて、琵琶湖について学ぶ機会がすごくたくさんあつて。でも勉強していくと「今こういう課題があつて」とか、例えばそれが地球温暖化であつたりとか。私の時は外来種がすごく問題になっていて。で、私なりにどうにかするべきだつていう気持ちがあつて。それでサイテック部にも入つたし、環境問題とかそういうのにすごく関心があつたし。

で、なんて言うのかな。自分で何かしたいつていう思いがずっとあつて。じゃあ環境問題とか、その生物多様性とか、そういったことを学ぶんであれば日本じゃなくて、海外で、かつオーストラリアはそういうあの学問がすごい進んでるから、オーストラリアで進学して勉強したいなつて思うようになって。で、そういった思いですつと海外の大学に入つて研究もして。で、研究をしていく過程で「分からないことを明らかにする」つていうのが研究なんですよね。分からないことを明らかにして、それを論文に残すつていうのが大学の研究のすること。なんかそうじゃなくつてもっと自分が「解決策の一員」とか一部になりたいなと思ふようになって。もう少し自分が貢献したいとなつて、それってなんか研究じゃないよねと思つたんです。じゃあそれをどうやってやつたら

いいのかつていうのを自分なりに考えた時に、自分なり、その会社なりに解決策つていうのを見つけて。で、それを実社会に組み込んでいく。ビジネスとして、人の営みとして組み込んでいくことが重要なんだつていうのを感じて。で、研究をやめて会社に勤めようと。そういう問題になんかこう挑戦してる会社に入ろうと思つて、今の会社に。

—ああ、すごい。なんかもうすごい憧れ。

すごくない。全然すごくない。もう今もずっと分らない。けど、業務で難しいこともたくさんあるんですけど、ずっとやりたかつたことをこうやってできているので、なんか諦めないで頑張れるなつていうのがある。

—そうなんや。じゃあ、やつぱりその最初のタスマニアに行つたつていう経験が結構すごい影響してるんですね。

影響してるんだと思います。

—立命館守山に入ろうと思つたきっかけとか理由はあるんですか？ あ、そう。ていうか高校からですか？

その時は（立命館守山）高校がちようどできた年。私二期生なんですよ。私はもう普通に、ちよつと向こうにある守山中学にいたんですよ。だからこの学校は近いしつていうので、本当にそれだけで選びました。正直。

—じゃあもう大成功ですね。

本当に大成功だと思います。

*

一番の思い出

—高校生活で一番大変やつたことつて何ですか？

「水フオーラム」ですね。運営がやっぱりすごく大変でした。タスクが山ほどあって。最後には宣言文を出したんですけど、それを仕上げるまでが本当に大変で。その時、私が自分の百パーセントの力を出して英語で書いたんです。でも、それをまるっとネイティブの先生に直されちゃって。確かに正しい英語になったんですけど、自分が伝えたかったことが変わってしまった気がして。だから「やっぱり元の文章をベースに書かせてほしい」とお願いしたんです。ただ、他校の生徒とやり取りして完成させるのは無理で。準備期間も短くて、しかも他のプログラムも並行してあったので、三、四日くらいしかなかったんですよ。当時は今みたいにSNSが発達してなかったから、事前にオンラインでやり取りすることもできなくて。ほとんど現場で作り上げるしかありませんでした。

―その時は学校に泊まっててことですか？

そうそう。BKCの宿泊施設に泊まって。夜中に他校の生徒や先生たちと集まって「ここはこうしたほうがいい」って話し合いをして。夜遅くまで作業してました。もう一つ大変だった思い出があって。フオーラム中に、まとめのビデオを作ろうとしていたんです。でも結局、時間がなくて間に合わなかったんですよ。私は直接編集をしていたわけじゃないんですけど、「こういう感じにしたい」というイメージを出して、それを映像に落とし込んでくれる子がいました。でも作業が間に合わなくて、本番の日にその子がすごく泣いてしまっただ。私はそのビデオをすごく大事に思っていたから、なんかそれが大変だったなっていうか心に残ってる。

*

大学時代から今

―大学の、海外での生活は大変でしたか？

はい、めっちゃ大変でした。お金もなかったし、ちゃんと単位が取れるのかどうかという不安もありました。レポートと最後のテストで評価される仕組みで、四十パーセント以下だと再履修しないといけないだったんです。テストも三時間で全部書く形式で、留学生の私にとってはすごく大変でした。

―その頃はもう英語はペラペラだったんですか？

全然下手くそでした。大学の三年間はずっと下手だったと思います。でも「絶対落とせない」「親に迷惑をかけられない」と思って、必死に頑張りました。

―いやあ、大変ですね。向こうでバイトはしてたんですか？

ほとんどしていませんでした。余裕がなくて。毎日授業を受けて、次の週の授業の予習をして、提出物をこなすので精一杯でした。

―なんというか、留学を通じて自分は大きく変わったと思いますか？

本質的な部分は全然変わっていないと思います。ただ、視野はすごく広がりました。英語ができることで博士課程を終えた後の就職先も、アメリカやオランダ、イスラエルなど海外も含めて考えられるようになったんです。日本にいたら絶対に思わなかったし、どこでも生きていけるんだろ的なみたいな自信が今はありますね。

―すごい。そんな自信が持てるようになったら強いですね。

でもなんか私にとっては別に普通なんだけ。強みと言ってくれる人もいるけれど、自分にとっては性格の一部くらいに思っています。

―まだまだ悩まれてるというか、まだまだやつ、ておっしゃってました。が、今の目標は何ですか？

藻類（植物プランクトン）を使ったプロジェクトに取り組んでいます

す。藻類は油やタンパク質を作るので、それを私たちが普段使っている製品に応用していくんです。今年はいくつかプロトタイプが完成していて、企業と協力しながら最終製品を作っていくのが今の目標です。

―高校生の時からそういう夢があったんですか？

いえ、高校生の時は研究者になりたいと思ってました。琵琶湖や環境保全に関わる仕事に憧れてたんです。でも大学で研究してるうちに「もっと社会実装に近いことがしたい」って気づきました。

―進路は迷わなかったんですか？

すごく迷いました。強い軸がなかったからこそ、興味があることを追いかけてきただけです。やりたいことを見つけられたらラッキーだし、見つからなくても悪いことじゃない。興味が変わったら、変えればいいと思うんです。実際、父も立命館大学だったんですけど、文系から理系に進み直しましたし。

―でも、林さんの話を聞いて、最初のタスマニアに挑戦したりとか、イギリスとか、水フオーラムとか、なんか挑戦する勇気っていうか、すごい大事やなっつめっちゃ思いました。

ね。そうですね。でもなんか、自分のなんだろう。コンフォータブルじゃないゾーンを逃げ出すってすごい大変だなっていうのは思いますが。自分もどこかで無理してるところはあるけど、やっぱりそこにいたくないんでしょうねっていう。元から、中学とか小学生の頃からアクティブにいろんなことに挑戦したりっていう、そんなキャラじゃなかったです。多分ここ（立命館守山）に入ってからだと思います。そんな感じになったの。

―それは自分からなんかちょっと変わろうと思って挑戦したんですか。

うん。なんか周りの環境とかも環境だったんだと思うんですよね。こういう機会あるよみたいなのが、多分今もそうだし昔もいっぱい出たと思うんですけど、そこで面白そうだしやってみるかみたいな感じだったかな。だからやりたいことをやったらいいよ、と思います。本当にそれだけ。やりたいこと、今一番興味あることをやったらいいよ。

―はい。何でもできる環境ですもんね。

うんうん、そうそう。だから自分がやりたいことをやれば本当にそれでいいんだ。高校生はそれでいいんだなって思います。何も頑張ろうとしなくていいよ。

―はい。じゃあこれぐらいで。本日はお話を聞かせてくださりありがとうございました。

はい。ありがとうございました。

（次ページへ）

【感想】

高校時代の経験を出発点に海外へ学びを広げ、今は社会に貢献できる場で働いている姿に強い憧れを抱いた。それを特別視せず、自然に自分の道として語れるところに本当の格好良さがあると感じた。自分はこれまで「頑張らなければ」と気を張ることが多かったが、話を聞いて「やりたいことを軸に努力する姿勢」が大切だと気づいた。今後は興味や関心に正直に向き合い、挑戦を積み重ねながら自分らしい進路を切り拓いていきたい。

上..語り手 林 愛子さん 下..聞き手 吉田彩乃

